



戦

慄

釜崎一歳

私は見た

蒼氓の群なすここ釜ヶ崎落日の街に

父と母を

妻と子を

幼き弟妹を棄てて流れ来た

己が人生の過まてる諸行の数々に責めさいなまれながら

激烈な一杯のバクダンに

安息の時を求めてさまよう群像を

北へ向って歩いて行く孤影を

私は見た

人生のあらゆる苦悩の充滿する

ここ蓮沼の街に

今日も落日の栄光を求めて漂泊う

孤独の精神を

かの日私は、群馬高崎の友から詩神を植えつけられなかつたならば、かの日私は、絶望と孤独に堪えかねて、私を欺き去つた女に復讐をなし、蒼白きこの額に前科者の烙印を押され、数々の悪行を重ねながら、激烈な一服の麻薬を求めてこの街をうろついていたかも知れない。

かの日私は、父の云いつけに叛くことなく大工になつていたら、あるいは今頃、黒い背広を身に

私は見た

思想を失つた数千の群集が

権力に抗して投石し

血を流した釜ヶ崎旧紀州街道を

権力に抗することなく

阿諛（あゆ）追従するあくせくとした人生に愛想をつかし

この街に流れ来た男が

今宵寒々とした姿で

まとい、胸にダイヤモンドの金バツジをつけ、肩で風を切つてこの街をのし歩く無頼の徒になつていたかも知れない。

— 静かなる戦慄

かの日私の最良の精神が、詩神に憑かれたばかりに、なぜか私は、死の灰の怖れも知らず、下界の暗い河床にひしめく、人の世の苦悩を求めてさまよう、孤独な人間と化したのであつた。

裸の会長。

若々しい情熱に溢れている。

警察官ではあるが、会員からは、警察官としてではなく、親しめる肉親のように慕われている。

温厚にして包容力のある人。

本名——松原忍

（広野記）



孤

独

今 島 孝 道

遠い昔の想い出の

幼い胸にただひとつ

清くてきれいなあの花は

私の心に今もなお

そつとやさしく呼びかける

あなたは孤独というけれど

私は絶えず一緒なの

甘くやさしいささやきに

孤独はいつも幸せだ

遠い昔のあの花は

今じやいずこで咲いたやら

鳥取県出身 四十二才 独身

現在西成労働福祉センター主事、西成労働分室発足当時から勤務していて、裸の会の発起人の一人である。東京都庁清掃部を振り出しに、曾我廼家十吾の門下生として家庭劇俳優、ダンスホール歌手等の経歴がある。正義感が強く、不正なことがあれば誰にでも噛みつく熱血漢である。釜ヶ崎にはなくてはならない人材の一人といえよう。

裸の会を背負って立つたメンバーの一人であるだけに多忙とはいえ、裸の会の会合には時々顔を出してもらいたいし、文才がないというような謙譲の美を發揮しないで、たまには一篇の詩でも投稿していただきたいと思えます。

(松原記)



短歌

田中 枯葉

ストーブひとつ宿の大部屋に臭気充ちタオル
かぶりて着のみ眠れる

けものめく臭気たちこめ新聞の紙音たかきド
ヤの大部屋

子は家出生計楽てう母ありて夜毎客ひくかな
しこの街

春めけばやがて来る夏おそれると宿に住いて
十年近き人

雨のスト交通まひも縁なきあぶれ労務者軒場
に寄りて

夫婦てふ絆かなしもいさかいの傷癒ゆるなく
尚共に住む

病苦 孤独逃れんとして酒を呑み酔えば死期
いう労務者あわれ

本名 宗野起代子 四十四才 大阪府出身

西成防犯相談コーナーの当初から、コーナーの一員として松原主任
のよきパートナーとなり、裸の会創立後は会員としても松原会長を
よく援けた。

釜ヶ崎のママさんと呼ばれ、会員はもとより一般労務者からも親し
まれ、慕われた。

社会生活の中では、どんな人にも多かれ少なかれ、敵があるものだ
が、この人に限つて不思議に敵がない。この人を知つて数年、未だ
曾つてこの人の悪口を耳にしたことがない。これは大したことだ
と思う。その人柄はこの人の短歌にしみ出ている。

現在、幸福な結婚生活に入っているが、これは当然、この人に酬わ
れて然るべき帰結であり、至妙なる天の配剤といふべきか。

(広野記)



ち ま き

津田太良

しえんせい あれなんです
う？ どれ？

あの姉さんの手仕事や

あれは「ちまき」だよ

あれ やっぱり食べるんですね

そうだよ ほかにうまい物がないじやなし

どうしてまた作るんですか

あしたは端午の節句だよ

ああ供え物ですね

粉米を粉にしてこねたのを 葦の軸にくっつけて

葦の葉でくるんで蒸すんだが

やつぱし砂糖をつけるんですよ

残り物の大豆を煎って 臼引きした粉に塩味をつける

そんなことして何になるの

せいたくと貧乏に耐える行事だよ

どうしてそれが？

ちよっと待ちなよ これからお百姓にとっちゃ大変だ 去年の取

入れ水の喜こびを も一度味わえる望みを目指し 祭だ 酒だの

ドンチャン騒ぎにふんぎりつけて 生粉米噛んで 塩をなめ 梅雨

の長雨 焼けつく大地 逆巻く台風を前にして 根性つける習わし

さ

へエー あんなん食べて着くかしら

どつこい そいつは門ちがい

根性つけるも つけないも

あんた次第だ わしや知らん

本名 津田太郎 六十三才 大阪市出身 劇団くるま座主宰

大正十二年頃、劇団異端座に入座、同十五年築地小劇場において助演したことがあり、以来小劇場運動を続けている人。

昭和二十八年四月、当時の今宮市民館長長谷川民次郎氏の招へいにより「西成市民館新劇研究会、劇団くるま座」を結成し、毎年二回定期公演をなし今日に至る。

昨年の春、読売テレビ放送による「けったいな奴」に出演したことがある。

庶民的な風格を備えたこの人の人間性は、この人がこれまでに書き残している「どぶねずみ」「余情」「ほっこり」等数多くの脚本の中に滲み出ている。くるま座が公演する脚本も殆んどこの人が書いたものを使っている。

生涯を演劇に打ち込んでいる人であるが、素晴らしい油絵も描けば、詩も書くという器量人である。裸の会発足当時に入会した最古参会員の一人でもある。

(松原記)



短 歌

辻 本 圭 子

母の愛二十年の長き風雪も吾子の成人に吹かれ消え去る

けたはずれの猛暑の夏をおくりきて庭木のつかれ葉末にも見え

代筆を頼まれてかくその人のうなじの汗の玉のしずくかなし

異状乾燥スラムの路地奥にタライの裸形水しぶきあげる

いまにして思うことなし母ひとり三人の子を育てあげしか

本名 辻本ひさ五十一歳 大阪府出身
砧三郎氏の実妹、鹿兒島県立第一高女専攻科卒業、昭和十一年軍
人であった辻本信一氏と結婚、翌十二年渡満、終戦と同時に夫が抑
留されたため、二児を抱え幾度も死線を越えて、昭和二十一年六月
帰国、以来裸一貫で身を立てなおすために、生活苦と闘って来たとい
う。
昭和二十五年十一月大阪府巡查となる。現在西成警察署防犯相談
コーナー員。
裸一貫で立派に子供たちを養育し、家庭を築き上げたということ
は、この人が努力の人であるからだといえます。
私のよきパートナーとして、骨身惜しまず裸の会の育成に努めて
くれることから「釜ヶ崎のママ」といって会員たちから親しまれて
いる。日本人離れた容貌から、町を歩くと子供たちから「ハロー
・ハロー」と呼びかけられたこともあるという。ストロームさんと
共に会員の中では、異色ある会員のひとりといえるでしょう。いつ
までも釜ヶ崎にいて、ママ振りを大いに發揮してもらいたいものだ
と思います。
(松原記)



自己自信

E・ストローム

人間の心は

冬の空のように見えましたが

雲が多くて

雲が重くて

晴れている所はない

人間の心は

野原のように見えました

わたしは弱くて

わたしは下手で

わたしはなにもできません

野原のように踏み道がない

わたしはひとつの言葉を聞きました

それは春の青空

山桜のようです

わたしは何をしましょう！

人間の心は生きているから

自己自信が芽ばえる

本名 エリザベート・ストローム 四十三歳 西ドイツ、ウルテンベルグ洲出身、ルーテル教会宣教師

彼女は今から十一年前宣教師として単身来日、以来東京、静岡等に住み日本の風習や生活環境になじみ、昭和三十九年四月来阪、同年九月から釜ヶ崎に住みついた人である。

現在「子供が居るため働きに行くことが出来ない」という貧しい人達の子供を八人ばかり預かって世話をしているが、これは彼女がなさんとする本来の仕事ではなさそうである。多くを語らないが、釜ヶ崎で永住する覚悟でやつて来たという彼女は、将来何か大きな仕事をしようと考えているようである。日本語は実に巧みである。彼女の自宅を訪れるマスコミの人達が「どういう動機で釜ヶ崎にやって来たか？」との質問に対し「あんな達の質問は皆同じやないの」といった具合に、マスコミに対する応対振りには実に手厳しい。彼女はクリスチャンであるが、彼女の偉さは、接する人をして宗教臭い匂いを全然感じさせないところにある。日本の宗教家にはえてして偽善者が多いが、実践的行動をモットーとして黙々と歩み続ける彼女の姿こそ、大いに学ぶべきである。

(松原記)



神と無題

井上青竜

— イ・エス・キリストの系図、夜の路は白く交わり、水仙を捧げし夜半の日の暈 —

神を失ったから この街に来たのか
この街に来て 神を失ったのか
そんなことは どうでも良い程に
長い年月を失ってしまいました

もはや

薄い影さえ落とさなくなった肉体を

ひきずって歩く

白日夢のような この街のヒル

突然

獣のような飢餓に咆える

この街のヨル

どちらにしても

余りにも ひとりりで在り過ぎる故に

時には

自己を失った己の影だけが

この街の白い十字路に陥ちている時

幼い日に識った

神との独自の記憶が

濁った意識の表皮に

泡沫いて来ます

本名 井上清龍 三十四歳 高知県出身 写真家

この人が写真家として名をなすに至った分岐点は、釜ヶ崎事件であったようだ。彼が抱く生来のアナキズムが釜ヶ崎に住む人たちに共鳴し、昭和三十四年頃からカメラを持って釜ヶ崎に入り込んだという。

昭和三十六年三月第一回個展「人間百景釜ヶ崎」を開いたが反響はなかった。しかし釜ヶ崎事件後、彼の写真は一躍脚光を浴び、日本写真家協会から新人賞をもらい、祝賀会に参加させてもらった記憶がある。

昭和三十七年五月個展「絶叫のあと釜ヶ崎・冬の労務者」を開催、益々写真家としての地位を固め、以後釜ヶ崎の延長線としてカメラを握り創価学会、在日朝鮮人の問題と取り組み現在に至るが、十年の写真歴をもつている。

裸の会には結成当時から参加し「裸」創刊号を発行した時は、会の仲間たちと共に、夜遅くまでカンを切ってくれた記憶がある。

釜ヶ崎を愛することは人後に落ちない位、釜のアカを身につけていると自負する彼は、アナキストであるだけに、人間の持つ弱い側面をアナキシーな意識と表現で見事に詩っている。

「裸」二号にも「絶叫のあとさき」と題した見事な詩を発表している。彼は写真家であるためだけに詩は書かないが、書けばこのように詩いあげる詩人でもある。彼があのように素晴らしい写真を撮るといふことは、彼が勝れた詩人だからである。

ホルモンの好きな彼のエネルギッシュな顔を見ると、写真家というよりも詩人といった風格を備えた人に見えるのである。

裸の会にあっては誇りとする会員の一人である。

(松原記)



俳

句

郡

紫
光

停年や次の仕事を花の山

酔ひどれも挨拶に来て春麗ら

テーブルの上に寿司あり春の顔

春の山抜け出て塔の高き哉

深山寺訪ふ人もなく花の散る

本名 郡 昇作 六十五歳 徳島県出身 無職
大阪英語学校を卒業、この人の職歴はたくさんあるが、府市職員として、社会福祉
関係の仕事をして来た人である。

昭和九年から昭和十九年までの間、大阪市立今宮保護所長や今宮市民館長として勤
務したことがあり、釜ヶ崎暴動事件直後の昭和三十六年九月一日、暴力手配師を閉め
出すために設置された、大阪府労働部西成分室長として就任、昭和三十七年十月一日
をもって西成分室は財団法人西成労働福祉センターとして発足後は、職業紹介部長と
して勤め、本年二月十九日定年退職するまでの間、労働者たちのために骨身惜しまず
尽した人である。

この人の温い人間性は、労働者たちの心に深く沁み込んでいるとみえ、退職を惜し
む声が多い。このように多くの人たちから慕われている方であるだけに、釜ヶ崎から
去って行かれるということは、残された私たちにとっては淋しい気がしてならない。
裸の会発足当時に入会した会員のひとりである。

(松原記)



病める巨象

本田良寛

釜ヶ崎は象である。病める巨象である。この象は、巨大なエネルギーをうちにひめており、動くとき、昭和三十六年の夏に動き、五年目のことし五月また動いた。病める象だが、決して死ぬことはない。釜ヶ崎のような大きい象やら、小さい象やらが日本にふえつつある。しかし、この象をコントロールすることは可能だ。病める象を少なくとも健康な象にすることは可能である。

いまの釜ヶ崎は、アリ地獄である。いったんはいると抜けだすことができない。もがいている間はどうにか砂の上で沈まずにいることができるが、一度足をとめ手をとめると、病氣——死というアリ

地獄に食いつかれる。釜ヶ崎でもがいている人はアリであり、いまの釜ヶ崎対策はアリ地獄の壁であり、崩れる砂である。

(「にっぽん釜ヶ崎診療所」より)

本名 本田良寛 四十一歳 大阪市出身 大阪府済生会今宮診療所長 医師
大阪市立医学専門学校卒業後自宅で開業医をしていたが、昭和三十八年一月から今宮診療所長となる。

現在大阪府社会医学研究会代表、大阪府医師会公衆衛生委員会委員、日本公衆衛生学会員、大阪府献血推進協議会専門委員、等の肩書きをもっており、過去の業績により、日本公衆衛生会長から表彰を受けた他、四回の表彰がある。

昭和三十年から三十四年頃までの間、大阪城横の造兵工廠跡に巣食った「アパッチ部落」の解放に乗り出し、医療や部落民の更生に協力したことから「アパッチ医者」と呼ばれるようになったことは有名である。

釜ヶ崎は象であるというが、ヌーボーとした風格を備えているこの人こそ、鋭い感覚をもった象である。象が釜ヶ崎という病める巨象にメスを振おうとしている。その初動が、こんど朝日新聞社から出版された単行本「にっぽん釜ヶ崎診療所」の発行である。

陰でこの人のことをとかやくいう人がいるが、それは、昔コロンブスがアメリカ大陸を発見して帰国した時のエピソードに似ている。この人は今まで釜ヶ崎において、誰もなし得なかった仕事に打ち込んで来た人であり、その仕事に生涯をかけてなげようとしているのである。

裸の会員の中にあっては頼もしい存在であり、誇りとすべき会員のひとりである。

(松原記)



不安な雑草

高木千代吉

雑草の中には、花を咲かせる草がある。それを発見したなら、すみやかに移植してやる。苗床、つまり社会福祉の手をのべる。移植する雑草、牧草、芝生等々。社会悪的存在、善悪の基準が狂っている雑草は、すみやかに刈りとらねばならない草がある。この種の雑草は分析の必要がある。

労働福祉センター、防犯コーナー、愛隣会館、愛隣寮、その他道路、街頭など、建物の様相、施策は

変っても、実質的にはむしろ不特定労働者が膨張をたどる一方であるを憂いるものであります。

本名 高木千代吉 五十才 青森県出身 西成労働福祉センター主事

大正六年の一月一日、青森のリンゴ園で生まれ、弘工の機械科を出たが昭和九年に関東軍に現役志願して入隊、満蒙から北中支、海南島と転戦して昭和二十三年に復員した。戦時中に両親を失い、農地改革で土地も没収されたので日雇いとなって転々、沖繩まで行った。

大阪に来たのは、昭和三十一年、市土木局の臨時取員をしていたが昭和三十六年、労働分室ができた時から同所に勤務している。現在は厚生部の主事。

裸の会ができた時に入会した古い会員だ。

(田結記)



おれはどやっ子

黒川龍介

ポストの上にもたがって

空を見あげてうたってる子

「坊やそこでなにしてる」

「かあちゃんかえるんまってるんや」

雨 嵐にたたかれて

なおたくましく生きるんだ

へんな同情よしとくれ

アツタカイマンマヨミンナデタベタイ

ヤワラカイベッドモホシイ

トウチャンノエガオモホシイ

ヤサシイカアチャンモホシイ

おいらがおとなになったなら

おいらがえらくなったなら

こんな思いはさせないぞ

いまのおとなのオエライ人よ

おいらの爪垢あげようか

本名 黒川龍介 42才 兵庫県出身 大阪市児童福祉司

昭和35年西成区担当。昭和37年愛隣会館設立と同時に釜ヶ崎担当
昭和四十年生野区担当。時折役所の帰途、釜ヶ崎の立飲屋で飲む。
児童文学が専門で、近畿児童文化同人でもあり、日本児童文学者協
会に所属している。

愛隣会館に赴任するやただちに裸の会に入会、毎号童話を発表。

例会には時折軽妙な童謡踊りを披露する。

住居と取の問題が釜ヶ崎の児童問題解決に直結すると主張してい
る。

(松原記)